

1. ブルとブルドッグ

今は昔、スコットランドの片田舎の農場で「そいつはブルだから近寄ったら危ない」と諭されたことがあった。なるほど驚くほど巨大な牛である。尖った空気が辺りに立ち込め、陰呑だ。牛乳石鹼のトレードマークのような穏やかでのどかな雰囲気など微塵もない。

ところでブルとは何か。

後年、外山滋比古の『日本語の論理』で「ブルは去勢されていない雄牛」との記述に出くわして、スコットランドのブルの姿が蘇った。

通例生後6ヶ月未満で雄牛の多くは去勢される。脂肪を増やし、肉質を柔らかくするためだ。雄性ホルモン（アンドロゲン）の分泌が減ると温和になり、脂肪も増えるという。この去勢された雄牛が ox。

他方、去勢されない雄牛は気性が荒く、闘争心が滅法強い。これが bull。この中から種牛が選ばれる。で、ブルは危険だということになる。

さて近所にブルドッグが飼われていた。誠に愛嬌に富み、ぬるいミルクのように柔和であった。このブルドッグの姿をほほえましく眺めていたとき、この犬の名の由来はブル+ドッグであることが天啓の如くひらめいた。では、なぜこの犬がブルなのか？

2つの可能性に思い至った。

1. ブルのような犬。どこがブルなのかというと顔つき。その風貌は、生来の犷猛な性格を眼の奥に仕舞い込んでいる（ような気がする）。
2. ブル専門の牧畜犬。気の荒いブルをうまく柵の中に追い込むように訓練された犬だからブルドッグ。

しかし2つの仮説共に全くの間違いであった。最近英国の闘犬の歴史にブルドッグが登場することを知った。ブルと犬を戦わせる見世物「ブルベイツィング (bullbaiting)」が人気を博し、このショーのために品種改良されたのがブルドッグである。ブルドッグとは闘牛犬であった。

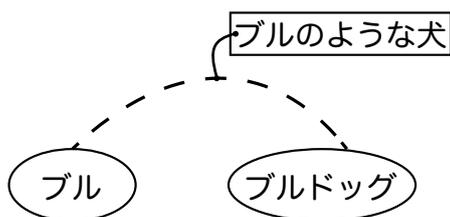
2. 「ブルとブルドッグ」関係の理解

私の認識におけるブルとブルドッグの関係図を以下に示そう。

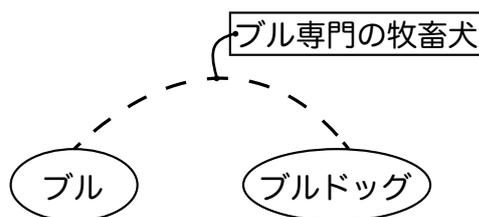
或る日、ブルドッグはブル+ドッグであることがひらめいた。



次に仮説が2つ浮かんだ。

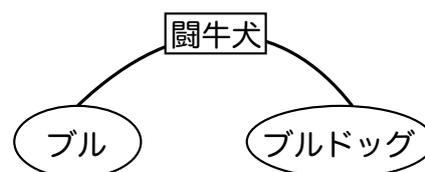


仮説1



仮説2

そして最後に歴史的事実として、ブル専門の闘牛犬であったことが判明した。



3. 分かるプロセス

ひらめきは全く無縁であった二物が接触して飛び散るスパークであった。この二物をつなぎ留める仮配線に「ブルのような犬」または「ブル専門の牧畜犬」というタグが付けられた。これが仮説段階。次のステージに進む準備段階とも言えるだろう。

その後、「闘牛犬」の発見により二物の連結が完成した。連結はパズルのピースがピタリとはまって、意味のある絵が浮かび上がった時のように心が躍る。これが「分かった」瞬間である。

こうして私の語彙の中で「ブル」と「ブルドッグ」はカテゴリーグループを形成した。このグループの中には「闘牛犬」や「ブルベイティング」が含まれる。このようにして得たカテゴリーは失われることがない。



「ブル・ブルドッグ」カテゴリー

4. 分からないプロセス

「ブル・ブルドッグ」カテゴリーが未だ形成されていない人には、「ブル」と「ブルドッグ」の結び付きがない。この人に「ブル・ブルドッグ」カテゴリーを持たせるにはどうしたらいいか。

「ブル」をそもそも知らないだろうから、まずはこれを教えなければならない。

ブルとは去勢されていない雄牛である。去勢されない雄牛は獰猛である。去勢されない雄牛ブル vs. 犬の闘牛が昔英国で流行った。この犬こそブルドッグである。

これで「ブル・ブルドッグ」カテゴリーは形成できるか。できる人は恐らく稀だろう。なぜなら、去勢されざる雄牛 vs. 犬の闘牛という代物が、「天然仕上げの鮎」のように腑に落ちないからだ。

それでは次にどこへ手を打つべきか。無論、去勢されざる雄牛だろう。こいつが底意地悪く理解への行く手に立ちはだかっている。この障害物を乗り越えるためには、以下のことを教える必要がある。

即ち、うまい肉を得るために、普通雄牛は悲しいかな幼いうちに去勢される。したがって去勢を施されない雄牛は牧場にいる多くの去勢雄牛とは異質の存在であり、この牛の精子から生まれた息子牛を屠殺して肉質を調べ、種牛を決める。畢竟、去勢を施されない雄牛とは種牛の候補なりと。

だが、これらのことを、興味を持って理解に努める人が一体どれだけいるだろう。かくして未去勢雄牛 vs ブルドッグはなんだかよく分からない話に終わるのである。

5. 対話の効用

上の「分からないプロセス」は「教える－教えられる」関係において（つまり多くの授業で）電車の遅延のように頻発している。なぜか。それは教師の繰り出す概念が、生徒の手持ちの語彙とかけ離れているからだ。その結果生徒にとっては不可知の雲のような話が頭の上を素通りすることになる。

このような不幸を遠ざけ、生徒に「分かるプロセス」を歩ませる妙法がある。それは的確な問いを生徒に投げかけ、あとは生徒の対話にゆだねる方法である。

6. 対話を導く問い

問いが要求するものは答である。世界1位でなきゃいけないんですか。

答を求める作業を思考と言う。2位以下だって全然構わないじゃん！ いやー、やっぱ1位になんなきゃ意味ないっしょ。大体順位を問うこと自体がナンセンスなんですよ。

したがって最も意味のある思考がなされるのは、常日頃から薄々感じていた疑惑の根源を、問いの矢が正確に射抜いた場合である。1位でなければいけないのかと問う資格は誰にあるのか。

しかもその問いが容易には答を見出しがたく、加えて自身の懐疑に気づいた人々が集まった時、答の追求はその集団においてひととき熱心になされるに違いない。この追求を有効に押し進める手立てが対話だ。なぜなら対話は、思考が辿る道程そのものであるばかりでなく、複数いる対話者が知恵を出し合うことで、一人ではなし得ない思考の高みに人々を導くことができ、そのうえ答えを発見するに至るルートを集団が共に歩むことを促すからだ。共に進むことで対話集団全体が思考を共有する。

なぜ共有できるのか。

1. 対話する者は自分が持つ語彙の範囲内でしか発言できない。
2. 対話は対話者の思考のスピードによってコントロールされる。
3. 対話が語彙力または思考のスピードを超えた時は、質問により対話のポジションを自分の立ち位置まで引き戻すことができる。

3の補足：したがって思考集団においては質問のしやすい雰囲気を醸成すること、そのためには集団メンバー相互の関係を調整することが必須となる。

4. 上記3における質疑応答は対話者相互、ひいては集団全体の思考共有を促進する。しかもこのような対話の道筋は謎を解き明かすスリルに満ち、知的興奮を呼び覚ます。それ故、問いの追求、即ち思考は楽しさに満ちたものになるだろう。

対話による授業は、このコースを生徒に歩ませる。

対話型授業での教師の仕事は問いを発し、生徒の対話の往き来を整理することだ。教えるという行為は対話を遮断し、生徒自身による発見を阻害する。それは往々にして、生徒から分かる喜びを奪う結果につながりかねない。教師が教えることをやめた時、理解への王道が生徒に開かれる。

(2013年5月)